最高の喜劇作家　芭蕉

悲劇を喜劇に

2022/07/23

月岡芳年「三日月の頃より待ちし今宵哉」（『月百姿』）

いまの世の中、悲劇が多すぎます。願うことなら、私たちの人生は幸せいっぱいであってほしいものです。人は、悲劇よりも喜劇を望むものです。それで、小説家も、劇作家も、オペラの台本作者も、悲劇を喜劇に仕立てあげました。セルバンテスは滑稽小説『ドン・キホーテ』を書きました。シェイクスピアも、悲劇の最後は、必ず、例外は二三あるものの、喜劇で終えました。モーツァルトのオペラの台本作者ダ・ポンテも、主人公が地獄へ堕ちる《ドン・ジョヴァンニ》の最後は喜劇で終えました。すべて、めでたし、めでたしです。我が国の喜劇作家はと言えば、なんといっても芭蕉です。芭蕉は、悲劇的な状況を、無理矢理、喜劇に変える喜劇作りの名手です。

道野辺の　木槿(むくげ)は　馬にくわれけり

貞享元年（1684）八月、四十一歳の芭蕉は、門人苗村千里を伴って深川の芭蕉庵を出て、東海道を上って伊勢へ向かいます。そのときの紀行文『野ざらし紀行』で、大井川を越えたときに詠まれた句です。

句意は ―

同伴者の弟子が、道ばたに立派な木槿の木がたくさん並んで植えられているのに一つも花が咲いていないのを悲しく残念に思いました。芭蕉は、「先にやってきた馬が、木槿の花をみんな食べてしまったのだ」と答えました。千里は大笑いしました。

これが受けたので、芭蕉は、「馬の上から詠める：馬上吟」と偽って題して紀行文に載せました。実際に、馬が、木槿の花なんか食べるもんですか。

梅白し　きのうは鶴を　盗まれし

なんだかさっぱり分からない句です。『甲子紀行』に載せた句です。この句の前文に、「京にのぼりて三井秋風が鳴滝の山家を訪う」とあります。そのときに秋風のお屋敷の梅林の白梅が咲き誇ってとてもきれいだったの

で、まるで、梅が好きであった中国の宋の時代の隠士林和靖が隠栖していた山荘のようだと思ったのです。だが、林和靖が好んでいた鶴が見えない。そこで、詠んだのがこの句です。

句意は ―

白梅が咲き誇って、まるで林和靖のお庭のように立派です。おや、鶴がいませんね。昨日、盗まれたのですか？

名庭に鶴がいないのは悲劇です。そこで芭蕉は、「鶴は昨日までちゃんといたけど盗まれたのだ」と喜劇に変えたのです。みんなは、ドッと笑いました。これで、当主の秋風はご機嫌になり、一座はさらに賑わったことでしょう。ここでの芭蕉の役割は、宮廷での道化師の役です。シェイクスピアの劇に出てくる道化師の役です。見事な白梅林を誉めるではなく、そこにはいない鶴を惜しんで見せて、庭園の完全さを逆に強調したのです。これで、お殿さまも満足です。

閑さや　岩にしみ入る　蝉の声

「奥の細道」を紀行中の四十六歳の芭蕉は、元禄二年(1689)五月二十七日に奥羽の立石寺にきました。歌を詠もうと思ったのですが、なかなか良い句が浮かびません。あまりにも暑くて、ウワ～ン、ウワ～ンとセミの声がうるさいのでセミのせいにしようと思いました。

句意は ―

心頭滅却すれば、うるさい蝉の声もこの岩寺の大きな岩が吸いとってくれて静かになった。これも、神仏のおかげで、この句ができた。

「閑(しずけ)さや」と切れ字を入れて「静けさ」を強調するかと思ったら、逆にセミのうるささを詠んで見せたのです。でも、芭蕉の言葉の魔術に掛かって、だれも、うるさいセミの鳴き声が気にならないのです。

其のままよ　月もたのまじ　　伊吹山

これは安東次男氏の説に共感するものですが、元禄二年(1689)八月に「奥の細道」の旅で加賀の山中温泉まで来た四十六歳の芭蕉は、前もって「中秋の名月を大垣で迎えたい」という手紙を大垣藩士の近藤如行あてに出しました。しかし、芭蕉は大垣へ登る途中の敦賀が西行ゆかりの地であることを重んじて、ここでひとり名月を迎えることにしました。大垣へは同行していた曾良を先に旅立たせて、「どうやら、名月には間に合わない」と知らせました。十四日に大垣に着いた曾良から、芭蕉の遅延を聞いた大垣の俳諧師仲間はがっかりしました。名月の候から遅れて二十八日ころ大垣に入った芭蕉が詠んだのがこの句です。

句意は ―

名月なんかなくっても、伊吹山はそれだけで立派に美しいから、その孤高な姿を一緒に楽しもうではないか。

でも、我がもの顔の師匠をもった悲劇を、地元の名山を誉めて喜劇に変えたそんな負け惜しみの師匠の句に、大垣の俳諧師たちは複雑な気持ちであったことでしょう。

私はこのときの言いつくろいをする芭蕉は嫌いです。月が、どれほど、歌詠みたちにとって大事であったかは、以下の西行の月の歌を読めば分かります。

もの思ふ　心の丈(たけ)ぞ　知られぬる　夜な夜な月を　詠(なが)め明かして

物思う私の心の深さに気付かされてしまった。毎夜、朝まで月を眺め明かしているうちに。

嘆けとて　月やはものを　思はする　かこち顔なる　わが涙かな

嘆けといって月が物思いにさせるのか。そうではないのに、月のせいにしたそうに（月にかこつけたそうに）　私の涙が溢れ出る。

月なくば　暮は宿へや帰らまし　野辺には　花の盛りなりとも

月が出ないのなら　いかに野に花がいっぱい咲いていても　もう、宿へ帰ろう。

月見れば いでやと世のみ思ほえて 持たりにくくも なる心かな

月を見ていると どうして二人の間はこうなってしまったのだろうかと 自分の心を持て余してしまう。

思ひ出づる ことはいつもといひながら 月にはたへぬ心なりけり

恋しい人のことを思い出すのはいつものことだ。だが、別れ際の面影を月にとどめてきたからなのか、月を見るとあなたへの想いが一層、募ってしまうのだ。

西行をはじめ、世の歌詠みたちは、月を見ると自分のこころを見ているような気になるのです。月は心の鏡でした。芭蕉も歌詠みです。大垣の仲間も歌詠みです。芭蕉はなぜ、お仲間が、芭蕉と一緒に伊吹山に掛かる月を見ながら自分たちの心を見つめたいと思っていたのに、どうしてそのことに気を配ってやらなかったのでしょうか？　これこそ、悲劇です。

星崎の　闇を見よとや　啼(な)く千鳥

『笈の小文』の東海道の部には「鳴海にとまりて」と詞書があり、四十四

歳の芭蕉は、貞亨四年(1687)十一月七日に寺島嘉右衛門安信宅で俳諧を興行しました。あいにくの闇夜で、「星崎の星空を観て欲しかったのに」とこの悲劇を亭主が残念がると、芭蕉は、すましたのもので、「闇夜の星も良いものですよ」と喜劇的に応えて亭主を慰めました。

句意は ―

いつもきれいな星空を見慣れている千鳥は、「たまには、闇夜の星を観なさい」と誘っているのさ。

闇夜では、なんにも観るものはありません。でも、「闇」を観ることはできます。「ないものをある」ように出してみせるのが、芭蕉の手品です。

霧しぐれ　富士を見ぬ日ぞ　面白き

今度は、富士山を歌った負け惜しみの歌があります。この句の前書きに、

関 こゆる日は雨降りで、山 みな 雲に隠れたり

と、あります。貞享元（1684）年の秋に、芭蕉は江戸深川の庵を発って東海道を西に進み、故郷伊賀へと向かいます。芭蕉四十一歳。『野ざらし紀行』の旅でした。箱根の関所を越えるときに山中で濃い霧に出遭って、それが時雨になって降ったので、終日富士山を観ることが出来なかったのです。さぞ、残念だったでしょう。

句意は ―

江戸にいたときは、いつも芭蕉庵から富士山を仰いでいたのに、近くに来たら見えなかった。

秋深き　隣は何を　する人ぞ

芭蕉は 元禄七年（1694）十月十二日に大坂の南御堂の門前、花屋仁左衛門の貸座敷で亡くなります。享年五十。その数ヶ月前の九月二十九日に、弟子で堺の商人根来芝柏(ねごろしはく)亭での俳会に招かれていましたが、体調が優れず、発句を載せて欠席の手紙を出しました。同席できない残念な悲劇的気分が、一転して、直ぐ隣の家にいて、共に楽しんでいる喜劇的で幸せな喜びが強く出ています。

句意は ―

私は句会には出られませんが、実は、お隣の家にいて、みなさまが句会に興じている楽しい様を、終始、味わっていますよ。

連句の席には、いないはずの芭蕉もちゃんといるのです。

都築正道